

○大樋町

此の地はもと郡地にて、大樋村の地内なりし故大樋町と呼べり。但し大樋町と此の地を呼べるは甚だ古き事なりけん。改作所舊記に載せたる延寶二年四月並松の儀に付里長への書簡に、既に如左載せたり。

往還道筋並松之根、田之方より掘申に付而、松たふれ申鉢相見候故、其段御算用場御奉行衆へは理申入候處に、松之根際を指除定杭をうち、其内を土取不申様に可申由に候之間、明日大樋町はなより枕うたせ可申候條、枕木爲持手代相添出し置可申候。爲其如此候。以上。

四月二日

渡邊藤左衛門

淺野與市郎

加賀郡往還道支配十村中

葛巻昌興自記に、元祿三年三月十七日金澤出火に付、飛脚江戸へ到着。大樋町迄燒行、依之大樋町罷通事難成、春日山へ上り罷越候由也。とあり。按するに、此の大樋町と泉野の地黃煎町との兩所は共に郡地にて、金澤町家へ近き地にて、そのかみ市中より稍遙に離れありし頃より、大樋

町・地黃煎町と呼びたりしといへり。龜尾記に云ふ。大樋

町の地は、むかしは大樋村の地内なりしを、町建に上地となり、町家を建てしかど、近き頃まで郡奉行の支配地なりしを、今は町奉行支配と成りたり。といへり。今按するに、

此の地邊を町奉行支配となりしは文政四年二月なり。此の時に郡地のヶ所悉く町支配と成りたるに依りて、それより更に町名を建て、地子町肝煎の裁許となす故に、此の大樋町も往古より私に大樋町と稱し來りしかど、此の時大樋村領の町地に大樋町と町名を更に建てたり。但し其の地所は郡地にて、地子米を大樋村へ收納し來れるを、明治十二年郡地の分悉く町地へ屬せられし時、此の大樋町も一般の町地と成りたり。

○大樋町戸數

舊藩繪圖所留記に云ふ。大樋の茶屋よりかなくさり川際まで古家、夫より末海手一軒古家、山手六・七軒古家、夫より新家也。長屋川之際海手に六軒、川を越えて海手に二・三軒古家、夫より末又新家也。間數等取調書に、

覺

一、八拾三間程

木戸より大樋橋迄

一、百十八間程

大樋橋より金くさり橋迄

一、四十六間程

金くさり橋より下村端迄

一、二百四拾五間程

一、六拾六軒

古家數

一、五拾二軒

新家數

一、百十八軒

右町奉行支配地につゞきて、郡奉行支配之新家等、爲見分取調繪圖出來。

右は享保十八年に取調有之繪圖の斷書の由記載有之。此の頃古家と有之は、其以前よりふるく家建有之分、また新家と有之ものは、其の頃新に建てたるものなるべし。是にて郡地家建の都合考ふべし。

○大樋村落

此の村は金澤下口街尾の村落にて、大樋の邑名は元祿十四年の三州鄉村名義抄に、大樋村は昔東の方に大樋有之に付、大樋新村と唱へ候處、後新の字を除き大樋村と書候儀、何頃の儀に候哉相知不申。とあり。年代摘要に享保十五年

町續き家數・頭振大樋村百拾一軒。とあり。此の家數はいま云ふ大樋町の戸數ならんか。さて大樋の邑名・町名共に、もと此の地に大なる樋有りて用水を取りたり。故に大樋の地名起れりと龜尾記にもいへり。此の村は小坂の庄内廿三ヶ村の一村なりしかど、村地悉く町地となりけん、舊藩中は無高の村とせり。

○金腐橋

或は金鎖橋とも書けり。金澤橋梁記に、かなくさり橋大樋に有之。とあり。正保四年幕府へ進達せし加能越三州道程調帳に、金クサリ川橋長さ十二間、幅一間。と記載したれば、川名を以て橋名となしたるにや。土屋義休の大路水經にも金腐川と記載して、小川橋あり。水源は森下川と同じとあり。但し淺香久敬の江戸道程記には、此の河の中に磁石ありて鐵を吸ひとるに依りて、此の橋に鐵を遣へば必ず腐り易し。故に金腐橋と名付く。といへり。又柴野美啓の龜尾記には、此の橋近年まで鎖を以て材木を繋ぎ架す。故に金鎖橋といふ。一説には此の水源はおこ谷の奥より出づ。此の水赤そぶ多くして水黄色に染む。此の橋の下も尙然